

「保育実習指導」で見えてきた保育科学生の問題点と保育者養成

—— 基本的な生活習慣と学習に対する意識を中心に ——

佐藤 達全¹⁾

The Training of Early Childhood Educators and the Challenges Faced by Them as Observed in “Early Childhood Education Practical Instruction”:

Focusing on Basic Lifestyle Habits and Learning Consciousness

Tatsuzen Sato

Abstract

It is important to conduct scholarly research on early childhood education activities. To elucidate the nature of children's physicality and psychology, to correctly understand the realities of developmental mechanisms, and to further establish the social system in which children live is of extreme importance to the favorable growth and development of children. Hence, initiatives toward the deepening of scholarly research into early childhood education are greatly meaningful.

At the same time, early childhood education has a long history as “an activity of people raising people.” When viewed from this perspective, I believe the study of early childhood education activities must be grounded in daily life. This is because academic theory alone is not enough to raise children. However, observing students aiming to become early childhood educators, a few points of anxiety emerge. The reason for this is that I believe their daily life often lacks stability. By extension, this negatively impacts their motivation to understand early childhood education activities.

It is important is to balance theory and practice. In light of this, I first introduce the current situation of students, and then consider the future direction for the training of early childhood educators.

Key words: early childhood educator training, early childhood education theory, life experience, purpose consciousness, motivation to learn

キーワード: 保育者養成, 保育理論, 生活体験, 目的意識, 学習意欲

1 想像力と生活体験が重要な保育活動

保育とはなにかについて、一般的な辞書には「乳幼児を保護し育てることである」と説明されている。さらに専門的な辞典には「乳幼児の心身

の発達を目的として、幼稚園、保育所などで行われる、養護を含んだ教育作用のことである。広義には、家庭の乳幼児を対象におこなわれる育児も保育と呼ぶ」と説明されている。^(註1)

また、『改訂子どもの教育と福祉の事典』（建帛

1) 育英短期大学保育学科

社) では

「やすんじそだてること。事のないようにそだてること、撫育」(服部、小柳『詳解漢和大辞典』)
「保護シ、撫育スルコト。(大槻文彦『大言海』)
「①まもり育てること。②幼児の心身を保護し、正常な発達を遂げさせること。幼稚園・保育所・託児所などで行われる教育」(新村出『広辞苑』)
「①幼児を保護して育てること。②(保育・哺育)乳を飲ませて育てること。〈哺〉は乳を飲ませること」(西尾、岩淵『岩波国語辞典』)

などと、4種類の辞典の説明を引用して説明した後、

「これらに通じることは、①「保護する」「まもる」「やすんじる」などの意と、②「育てる」「教育する」などの意の合体で、その対象は就学前の幼児である。就学後の学校の教育とは区別された、家庭や幼稚園・保育所などで行われる、乳幼児対象の「保護と養育」「保護と教育」というのがその語義である」

と説明し、歴史的には東京女子師範学校附属幼稚園が1877(明治10)年に制定した規則で「小児保育(第7条)」「保育料(第8条)」「保育時間(第10条)」などとして用いられたと述べている。^(註2)

そして、

「このように「保育」は、最初幼稚園における幼児の教育の意味で使われたが、その後社会事業の一環として、都市を中心に開設された託児所においても、「保育」の語が一般に使われるようになり、乳幼児の保護教育を示す用語として普及していった」

という説明^(註3)に続いて、

公用語としても1879(明治12)年制定の「教育令」あるいは1926(大正15)年の「幼稚園令」で、保育という言葉が用いられていることをとりあげて、戦後制定された「児童福祉法」「学校教育法」によって新たな発足をみた保育所、幼稚園においても「保育」が、乳幼児の保護教育を表す

言葉として使われている。

と説明している。^(註4)

ところが、その後で

しかし、旧『幼稚園教育要領』が公示された1956(昭和31)年ころから、文部省の幼稚園に関する公文書の中では、「保育」に代わって「教育」がその機能を表す言葉として、意図的に使われるようになった」

と説明して、当時の文部省が幼稚園を学校として明確に位置づけようとしていることを示している。^(註5)

しかし、学校教育法第三章では

「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」(第二十二条)と、その目的を説明するために「保育」という表現を用いながら、次の第二十三条では「幼稚園における教育は、前条に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする」

第二十四条でも

「幼稚園においては、第二十二条に規定する目的を実現するための教育を行うほか、幼児期の教育に関する各般の問題につき、(中略)、家庭及び地域における幼児期の教育の支援に努めるものとする」

等と「教育」という表現も用いているのである。

しかも、平成27年度から施行された「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」(第一章総則第二条の7)には、幼保連携型認定こども園について次のように規定されている。

この法律において「幼保連携型認定こども園」とは、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとしての満三歳児以上の子どもに対する教育並びに保育を必要とする子どもに対する保育を一体的に行い、これらの子どもの健やかな成長が図ら

れるよう適当な環境を与えて、その心身の発達を助長するとともに、保護者に対する子育ての支援を行うことを目的として、この法律の定めるところにより設置される施設をいう。

このように、幼保連携型こども園では、「教育・保育要領」という名称からも明らかなように、常に「教育」と「保育」という表現がひと組として用いられていて一体不可分の関係を示しているようである。もちろん、このことはこども園が誕生した経緯を考えれば当然のことであるが、その職に従事する者の名称も「保育教諭」とされていることから、こども園の性格が十分に煮詰まっていないようにさえ感じられる。

こうした点に関しては、認定こども園がスタートする前の幼稚園や保育所の保育内容を示した「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の説明を見ても感じられるところである。例えば、「保育所保育指針」には保育所の役割が「保育所は、養護と教育を一体的に行うことを特性とし、環境を通して子どもの保育を総合的に実施する役割を担う」と明記され、その「解説書」には「養護と教育が一体的に展開されるという意味は、保育士等が子どもを一個の主体として尊重し、その命を守り、情緒の安定を図りつつ、乳幼児期にふさわしい経験が積み重ねられていくように援助することです。子どもは自分の存在を受け止めてもらえる保育士等や友達との安定した関係の中で、自ら環境に関わり、興味や関心を広げ、様々な活動や遊びを通して新たな能力を獲得していくのです」と説明した上で、「このように、保育士等は、養護と教育が切り離せるものではないことを踏まえ、自らの保育をよりの確に把握する視点を持つことが必要です」と述べているのであるが、こうした説明を読むと、「教育」と「保育」と「養護」をどのように使い分けたらよいのかがますますわからなくなってしまうように感じられるのである。しかし、見方を変えれば、このことは乳幼児期の子どもとのかかわり方がいかに難しいもの

であるかということの意味しているのではないだろうか。

2 保育の難しさと保育科学生の問題

このように、乳幼児期の子どもとのかかわり方が難しいということは、それだけ保育や幼児教育が重要な役割を持った営みであるということにもなるのではないだろうか。

その一例として「幼稚園教育要領」の第一章総則の第1に示されている幼稚園教育の基本を取り上げてみよう。そこには

幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。

このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。

と、その方向性を示した上で、その際に重視すべきことがらが次のように示され、

- 1 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれに異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即

した指導を行うようにすること。

さらに、

その際、教師は、幼児の主體的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。

と、詳細な配慮が必要であることが指摘されているのである。

このように、さまざまな事柄に配慮しながら保育しなければならないことを考えると、そこに示された「生涯にわたる人格形成の基礎を培う」「幼児期の特性」「環境を通して」「幼児との信頼関係」「よりよい教育環境」「安定した情緒の下」「幼児の主體的な活動を促す」「幼児期にふさわしい生活」「ねらいが総合的に達成」「心身の諸側面が相互に関連」「一人一人の特性に応じ」「発達の課題」「幼児一人一人の行動の理解と予想」「計画的に環境を構成」といった事柄の一つ一つを、保育に携わる者はしっかりと受けとめなくてはならないとの思いが重くのしかかってくるように感じられる。

もちろん、幼児教育・保育は「生涯にわたる人格形成の基礎を培う」と「総則」に示されている通り、一人の人間の一生を左右するほどの重要な役割を担っているのであるから、そのように要求されることは当然なのであるが、実際に幼児教育・保育を学んで保育の現場に就職しようとしている学生は、保育活動に対してどのような意識を持っているのであろうか。

近年、大学生（短大生）の学力が大きく低下してきたことが報じられている。身近な学生に目を転じると、学力低下はもちろんであるが、それ以上に学習や日常生活への取り組み方に多くの問題が存在しているように感じられてならない。言い

かえると、単に学力が高いか低いかという問題にとどまらず、知識を学んだり技能を身につけたりすることに対する意識や日常生活そのものに問題があるのではないかということである。

じつは、こうした問題については、すでに柏木恵子が指摘をしている。

いま、日本社会では、子どもの「育ち」をめぐる様々な“異変”が取りざたされています。これまでも、度々、注目されてきた「不登校」や「引きこもり」。あるいは、そこまでの事態にはいたらないまでも、意欲が低い、自己肯定感がもてない、他人とのコミュニケーションがうまくできない、といった日本の子どもたちの傾向が、諸外国と比較したデータなどで明らかになっています。こうした問題は、昨今、話題になっている「学力低下」の問題以上に、子どもたちが成長し、社会生活を営んでいくうえで深刻な問題と言わざるを得ません。^(註6)

その上で、柏木は

昨今、日本社会では「子どもをいかに育てるか」「どのように賢く育てるか」といった関心から、子どもの“育て方”がとかく偏重される傾向もあります。こうした、“育て方”への親の熱心な眼差しには、「子どもが自ら育つ」という重要な認識が往々にして欠けています。それゆえに、子どもの「育つ力」を奪ってしまうことにもつながっています。

と同時に、育てる側のおとな、すなわち親自身が成長・発達することが、実は子どもの育ちにとって重要であることも、今日の社会ではほとんど認識されていません。^(註7)

と、親の側の問題を指摘している。

そして、このような親の意識が、日本の子どもの対人関係スキルの発達を妨げているとして、次のように述べている。

これが子ども自身の他者への関心や交渉能力の育ちをそいでしまっています。こうした場面をみていると、母親はちょっとしたことですぐに手を出すなどして遊びを誘導し、もう少し子どものす

ることに任せておけばいいのに、と思う場合が少なくありません。(中略)子どもは乳児のときから、他の子どもに対してなみなみならない好奇心をもっており、他の子どもと交渉する力をもっています。^(註8)

その結果、

「子どもが本来もっている、他者への関心や、他者と関わる力を発揮させ、発達させる機会を奪ってしまっています」^(註9)、

「日本では、できるだけのことをしてやるのが親の愛情だと考えられています。しかし、こうした考えは欧米などでは珍しいのです」^(註10)、

「こうしたあまりの過剰な親の関与、その一方で子どもの意思や希望を無視する傾向は、子にとっては『愛という名の支配』『やさしい暴力』となる危険をはらんでいます」^(註11)

と指摘している。

このような柏木の指摘は非常に重要であり、そうした親の意識に基づいて育てられた子どもが短大に入学しているのである。そこで、本稿を進めるに当たって、驚くような短大生の実態を紹介しておこう。

3 最近の学生の実態について

筆者は家政科の短大における教員経験(4年間)を経て保育者を養成する短大に勤務するようになったが、勤務校が変わった当初(1980年)、学生の生活態度や礼儀作法の違いが気になった。前任校は家政科の短大で、伝統的に礼儀作法を重視していたため、勤務校が代わった当所は多少の戸惑いを感じた。具体的には、保育科の学生は元気がよくて活動的だが言葉遣いや礼儀作法に関して疑問を感じるがあった。筆者はその頃に「道德教育」の授業を担当していたこともあり、基本的な生活習慣や礼儀作法について何度か調査したことがあった。^(註12)

その一部「家事のお手伝い」について紹介すると、家事を手伝うかという質問に対して「いつも

手伝う」は1年生(161名中)の35パーセント、2年生は(133名中)41パーセントであった。「することもある」は1年生の52パーセントで、2年生は38パーセントであった。「しない」は1年生の13パーセントで、2年生は21パーセントという結果であった。また、手伝いの種類は多い順に①掃除(1年生は66名、2年生は58名)②洗濯(1年生は63名、2年生は54名)③食事の準備(1年生は53名、1年生は52名)④食後の片づけ(1年生は52名、2年生は43名)⑤買い物(1年生は8名、2年生は7名)であった。

これと同じような事柄を、最近の学生が書いた生活に関する作文をもとにして推計・比較してみると、毎日のようにお手伝いをしている学生が少ないわけではないが、その数はかなり少なくなっており、手伝う時間もわずかであることが想像できる。その一方で、アルバイトをしている学生が非常に多く、お手伝いよりも収入につながる活動を重視している傾向が見られた。

家事を手伝うことで身に付く掃除の仕方や整理整頓の習慣が、保育者になるための実習に役立つことは言うまでもないが、お手伝いの経験が少ないことが影響しているからなのか、最近実習園からの指摘に「教室の掃除ができない(ほうきできれいに掃けない)」「雑巾がしぼれない」「教室の整理整頓ができない」といった内容が増えている。もちろん、こうしたことは学生の家庭生活スタイルが大きく変わってきたことにもよるであろうから簡単に結論づけられる事柄ではない。しかし、ペンの持ち方やノートを書いているときの姿勢、お箸の使い方や食べ方等は、子どものお手本として重要な意味を持っているので、生活スタイルが変わったからと言って見過ごすことはできないであろう。

ところで、当時の調査では *家族と一緒に食事をしているか *食後に歯磨きをしているか *食前や食後に挨拶しているか *夕食後から寝るまでに飲食をしているか *外出時や帰宅時に

それぞれの学生に「この地図で、(自動車でも電車でも)どのようにしたらこの園に行けるとおもいますか?」と質問したのだが、4人とも非常に驚いた表情をしていて、私には「自分が実習する園に巡回担当者がどのようにしたら行けるのか」という地図を提出する意味が理解できていないように感じられた。つまり「地図を書いて提出しなさい」と指示されているから書いただけなのである。

【事例2】実習中に注意や指摘をされた事柄

最近、短大における学習やピアノ等の実技以外に、基本的な生活習慣や日常的な行動の仕方について注意を受ける学生が増えているので、代表的な事柄をあげておこう。

- ①返事をするときや話すときの声が小さい(小さくて聞き取れない)。
- ②日常の挨拶がしっかりできない。
- ③言葉遣いが悪い。乱暴な言葉を話す学生が多い。
- ④自分から質問することが少なく、指示を待っている学生が多い。
- ⑤表情が硬く笑顔が少ない。積極的に動いたり自分から子どもに話しかけたりしない。
- ⑥掃除の仕方が身についていない。

こうした事柄は学校で教えてもらったり指導してもらったりすることではなく、生活を通じて身につける事柄であるが、そうしたことが最近では期待できなくなっている。

【事例3】保育者になるために必要な努力

「幼稚園の先生にあこがれていた」「保育園の先生になることが夢だった」とは言うものの、そのために「自分が何をしなくてはならないか」を考えようとせず、特に、保育者として求められている知識や能力であっても、苦手なことにコツコツと粘り強く取り組もうとしない。しかも、努力をしないで「わからないんです」「できないんです」と言う学生が増えている。

保育の専門家として現場に出たときに、それで困るのは自分だということが理解できない学生が増えている。

【事例4】実習を依頼する電話のかけ方

筆者が勤務する短大では、実習を依頼する正式な文書は大学から郵送しているが、その前段階として学生が電話を掛けてお願いすることになっている。社会人になるために電話のかけ方を身につける練習の意味もある。もちろん、最近は学生は携帯電話による友人とのやりとりがほとんどであるため、社会人としての最低限のマナー(電話のやりとりについての基本的なマナーや電話をかけて失礼でない時間等)については指導をした上で掛けさせるのであるが。

中には説明を聞いてメモ用紙に「もしもし〇〇園ですか。私は育英短期大学の学生で△△と申しますが、実習のお願いで電話をいたしました。園長先生はいらっしゃいますか」と、双方の言葉を書き出す学生もいる。そうした準備は学生の実態に即して考えると必要なもので、筆者が質問を受けた場合は積極的に勧めているが、ときには驚くべき事態が発生する。ときどき依頼をした園から伝えられるのだが、自分が書いた原稿を「棒読み」している学生がいることである。電話のやりとりを予め書いて練習することはよいのだが、重要なことは何度も練習してメモを見なくても会話のやりとりをある程度は記憶して実際に電話をかけることである。

棒読みをしたらどうなるかさえ想像できない学生が複数存在することは驚きであるが、事態はかなり深刻になっているのである。

ここに取り上げた事例は学習面以外のことであるが、保育者という専門家になるための学習面に関しても、それに取り組もうとする意欲は決して高くない。それを十分に理解するための基礎的な力が身につけていないからであろう。例えば、最近は実習園から「実習日誌が書けない」「文章が

書けない]といった指摘が多くなっていることも、そうした学生の実態を示している。

ただ、実習園からこのような指摘をされたからと言って、短期間で書けるようになることは不可能である。筆者は「日本語の表現法Ⅲ」(2年生前期)の授業も担当しているが、15回の課題作文の添削から、短大生レベルの(もちろん、どの程度を短大生レベルと考えるかは非常に難しいが……)文章が書ける学生は半数程度ではないかと考えている。

例えば、小学生の作文によく登場する、いわゆる「タラちゃん言葉」(楽しかったです・頑張りたいです)で課題文を書いている学生は、授業の開始時には1クラス(約50名)に10名から30名いる。日本語の文法では、助動詞「です」には原則として「活用のない語」が接続することになっているが、「た」や「たい」はいずれも助動詞であるから活用があるので「です」に接続することは正しくない。ただ、小学生の間は許容されているため、小学生の作文にはしばしば見られるのである。そうした書き方を身につけないまま、中学や高校を卒業して短大に入学する学生が多くなったのである。

こうした問題は、文章を書くときに「話し言葉を使わない」ことについてもあてはまる。学生が書いた課題文を読んでいると、会話をするときのままの言葉を書いている学生が少なくない。そのいくつかを紹介しておこう。

- ①……だなと思いました。
- ②……だけど、
- ③……したことがあるけど(ないけど・思うけど)
- ④いろんな
- ⑤ちゃんと
- ⑥……じゃあないと思いました。
- ⑦……だから、一生懸命に努力したいです。

4 学生の問題の背景にあるもの

学生の思わしくない事例ばかりを紹介したが、その姿はまさに柏木が指摘したことにつながるのではないだろうか。それゆえに、学生が自ら学ぼうとしない原因の一端は、幼少期からの生育環境にあったことが想像できる。柏木の指摘と同じ考えは日本保育学会会長で白梅学園大学学長の汐見稔幸も指摘している。汐見は『身体力の基本は遊びです』の中で次のように述べている。^(註13)

遊びをつうじて育つものは運動能力や、じょうぶなからだだけではありません。五感というのは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚ですが、子どもたちは遊びをとおして五感を育て、工夫する力や、自然や人とコミュニケーションする力など、さまざまな能力を育てます。これらの能力は「生きていくための基礎力」とも呼べるもので、やる気や集中力、社交性、協調性、ストレスに耐える力などにもつながっていくものです。社会が大きく変わろうとしているこの時代、社会で生き抜くためのこうした「身体力」ほど、必要とされる能力はありません(2~3ページ)。

汐見が指摘したように、子どもが主体的に夢中になって遊んでいるときは、子どもは「もっと楽しく遊びたい」「そのためにはどうしたら楽しく遊べるだろうか」と、様々なことを考えて、それを実行しようと工夫するものである。親や保育者に言われたり指示されたりして遊ぶのとは本質的に異なっている。それゆえ、汐見が指摘したように「やる気や集中力」や「工夫する力」が育っていくことは間違いない。

そのため、汐見は次のようにも述べている。

子どもが育っていく土壌ともなる生活が社会・文化の変容で大きく変化してきたため、生活の中での育ちに懸念が出てきていて、社会の力による意識的な育て方をより早期から始めなくてはならなくなっているという現実があります(「学問としての保育学の地位を高める」)。^(註14)

汐見が「生活の中での育ちに懸念が出てきた」と指摘したことは間違いのないだけでなく、すでに多くの学生がその波をかぶっていると言わざるを得ない。問題はその対応をどうするかである。

学生がこのように変化してきたのは、遊びだけでなくお手伝いをさせなくなったことも関係しているのではないだろうか。そのことは先に紹介した学生の生活状況調査からも想像できる。生活様式が変化したために親が積極的に手伝いをさせなくなったというだけでなく、手伝うことそのものがなくなってきたとも考えられるが、子どもにお手伝いをさせている家庭は多くない。

実は、保育の勉強は家事の手伝いから身につくことが少なくないのである。特に幼稚園や保育園で実習する場合に、日頃からお手伝いをしているか否かによって学生の行動の仕方に大きな違いが見られるという。教室や園庭の掃除はもちろんのこと、教室内外の整理整頓や子どもへの気配りなども、お手伝いをしているかどうかが大きく影響する。ぞうきんが絞れなかったり箒で教室や園庭を上手に掃くことができなったりする学生も少なくない。

子どものころからのお手伝いは、決して勉強の妨げにはならないのである。むしろ、仕事を手際よく進めるための工夫が勉強を効果的に進めるための工夫にも反映されるはずである。さらに、お手伝いが終わったときの爽やかさや達成感は心や体の発達に一段と大きな力になるのである。むしろ、身体と心が一体となって生きている人間にとって、身体をあまり使わないで頭ばかりを使うこと（勉強）は、適切でないと言えよう。

5 保育者に求められるもの

保育者は、基礎的な知識や技能を身につけた上で、目の前にいる子ども一人ひとりと向きあって、一人ひとりに応じた対応をすることが求められるのであるから、自分で答えを見つけようとする姿

勢が重要であることは言うまでもない。ところが、様々な面で「受身的」な姿勢が見られ、「指示を待っている」学生が多くなってきたのである。

自分が「いま何をしなくてはいけないか」を考え、「その方法を工夫する」ことは、短大生にもなればある程度はできたはずであった。ところが、実際に一つ一つ指示されるのを待っている学生が多くなった理由は、想像力が働かないからではないだろうか。そのため、その場に応じた適切な行動（自分で行動するだけでなく、分からない場合に質問することも含めて）ができないのではないだろうか。

これでは将来が不安になる。保育活動に「何歳児だからこうすべきだ」といったパターン化が通用しないことは当然であろう。保育には、想像力を働かせ、最適な対応を模索して自分で工夫し行動することが不可欠である。ところが、多くの学生は非常に貧弱な想像力しか持ち合わせていない。次に紹介するのは、実習から戻った学生の言葉である。

【学生 A】（園長先生から「挨拶ができない」と指摘された学生）「私はちゃんと挨拶をしていたのに、どうして注意されるのですか」と憤慨していた。そこで、私が「ちゃんと挨拶をしたというのなら、どんな挨拶をしたのか説明してごらん」と言うと、「朝、出勤したときに園長先生が保護者の方とお話をしていたので、邪魔をしてはいけないと思って、園長先生の後ろを通りながら黙って頭を下げました。私はちゃんと挨拶をしました」と言い張っているのです。

私はそれを聞いて学生に質問しました。「あなたは挨拶をしたと言ったけれど、あなたが挨拶したことは園長先生に伝わったと思いますか」と言うと、しばらく考えてから「伝わらないと思います」と答えたので、「挨拶はただすればいいというものではなくて、相

手に伝わるようにしなければしたことはないのではないですか」と説明して、やっと納得してもらえました。

【学生 B】2月の実習で乳児のクラスに配属されたとき、先生の代わりにおむつ交換をすることになったのだが、学生がお尻に触れたとたん乳児が泣き出してしまった。学生の手が冷たかったためである。おむつに包まれていたお尻いきなり冷たい手が触れたら、泣き出すことは予測できるはずである。寒い季節におむつを交換するときは、手を温める配慮が必要ではないだろうか。

【学生 C】乳児のクラスに配属された身体の大きな男子学生が、ミルクを飲ませた後に背中を軽くトントンしようとしたのだが、大きな手で力の加減がわからずにドンドンたたいたため、乳児が泣き出しただけでなくミルクも吐いてしまった。

【学生 D】責任実習の主活動として園庭でのゲームを計画したが、雨天の場合を想定した予備の計画を用意していなかったため、当日は雨に降られて散々な目にあってしまった（これは指導の先生にも責任がないとは言えないが）。

【学生 E】責任実習の主活動で風車の制作を計画したが、導入の説明が簡単すぎたため、説明後に「わかりましたか」と質問したところ、「わからない」という返事が続出した。学生の計画では「わかりましたか」という問いかけには「はい」という返事が返ってくると決めつけていたため、「わからない」という子どもの返事で「頭が真っ白になって、何もできなくなってしまった」という。

ここに紹介した学生は、いずれも相手のことを推し量ろうともしないで、自分の一方的な考えで行動したために失敗した例であるが、このような考え方や行動をする学生が増えているように感じられることも、学力低下と関連があるのではないだ

ろうか。

6 これまでの問題（参考として）

じつは、こうした学生の出現には十数年前から気づいていた。それは、その頃に担当していた「国語表現演習」の授業で学生が書いた文章に見られた顕著な特徴からわかったことである。その点については拙稿「保育科学生の文章表現力について」で紹介した。^(註15) ここでは13項目の表現上の問題点を指摘したので、まずそれを紹介しておこう。

- ①誤字や当て字が多いこと。
- ②主語と述語の関係が正しく対応しておらず、文章の構成がおかしいこと。
- ③助詞の使い方がおかしく、正しい日本語の文章になっていないこと。
- ④話し言葉のまま書かれていること。
- ⑤「見える」「食べれる」はもとよりのこと、「違く」「やっぱし」など「最新のはやり言葉」のような表現がしばしば登場すること。
- ⑥説明文を書く場合、主語と述語が正しく対応していない場合が少なくないこと。
- ⑦語彙が乏しいためであろうか、同じ形容詞や副詞を何度も繰り返し使っていること。
- ⑧代名詞を用いて表現することがほとんどないので、ものや人の名前などを何度も繰り返し書いていること。
- ⑨文章が長いため、「ので」や「が」といった助詞を用いてだらだらと続ける場合が多いこと。そのため、一つの文章が200字から300字も続いている文章を時々見かけること。
- ⑩推量表現（ではないでしょうか）がほとんど見られないこと。これは、与えられることに慣れてしまった結果、想像力が乏しくなったからであろうか。
- ⑪800字程度の文章を書くときに、一つも段落を区切ることがない学生も見られること。
- ⑫文末の表現がすべて「思います」や「です」

などワンパターンであること。

- ⑬文章表現力ではないが、テキストがすらすら読めない学生も少なくないこと。常用漢字すら完全に覚えていないことと、アクセントがおかしいために他の意味に受けとめられかねない読み方をしている学生が目立つこと。

ここで紹介した学生の文章に見られる特徴の中で、特に注目したい点は⑩の「推量表現がほとんど見られない」ことである。推量表現は文末を「～ではないでしょうか」と締めくくる書き方で、文章を書いている人が自分の思いを読む人に提示する書き方である。

つまり、推量表現を用いるということは、書き手がある考えを持っていることを意味している。ところが、国語表現演習の授業を担当していた時に、学生が毎週書いて提出する文章に推量表現が全く見当たらないことに気付いたのである。もちろん、文章の課題によって推量表現が必要でない場合もあるが、半期の授業で一人あたり15回の作文（毎回テーマを設定して提出してもらう。そのうちの12回は400字であとの3回は800字）に、200名ほどの学生の文章で推量表現を用いていた作文は1枚もなかった。筆者が、学生の文章表現と学習意欲や生活習慣を関連付けて考えるようになったのはその頃からである。

一般的に考えると、文章が書けないことは、

- ①保育者として指導計画や保育記録が正しく書けないという問題
- ②連絡帳等を通じた保護者とのコミュニケーションに支障を来すこと
- ③実習生の指導をする際に実習日誌にコメントを書くときの問題

の3点がすぐに思い浮かぶであろうが、それだけでなく、もっと本質的な問題が潜んでいるように思われる。この点に関しては以前に「文章表現から見た保育科学生の問題点——表現の特徴と思考力の関係——」という拙論^(註16)で「学生が書いた文章の実態は基礎学力の低下の問題として見

過ごせないことではあるが、こうした文章を見ていて保育科の学生にとってもっと深刻な問題があるように思われてならない」として、次の4点を指摘しておいた。

- ①推量表現がほとんど用いられていないこと
- ②代名詞で表現することがほとんどないこと
- ③「楽しかったです」といった、小学生の作文に見られる表現がきわめて多いこと（「です」は表現や一部の助詞に接続する語）
- ④「……できたらいいです」「……になったらいいです」といった他人事のような表現が非常に多いこと

である。この中で、推量表現が用いられないことは、具体的な「もの」や「現象」には目を向けても、その奥にある本質を考えようとする意識がないことを意味しているのであろうから、乳幼児の心を読み取りながら適切な働きかけをしなくてはならない保育者にとって問題であることを指摘したのである。

また、文章の中にほとんど代名詞が用いられないことも、具体的な人や物のことしか意識できないという点で同様の問題を含んでいるのではないだろうか。

さらに、「楽しかったです」「うれしかったです」という小学生の作文に特有の表現が多く見られることは、学生の意識レベルが小学生とそれほど変わらないのではないかという点を指摘したのである。このようなことから、保育科学生の文章に見える特徴は保育者としての資質の問題にもつながり、単なる文章表現にとどまらず、もっと重大な事柄の存在を示唆していると言えるのではないだろうか。つまり、推量表現の欠落は周囲の状況を考えようとする力の欠如であり、さらには問題意識を持って物事を考えようとする姿勢が欠落していることのあらわれとも言えるのではないだろうか。

7 問題発生背景にあること

それではなぜ、このような学生が増えてきたのであろうか。筆者が学生の学力低下や学習意欲の低下を強く感じたのは、入学試験に推薦制度を導入したときと指定校入試を導入したときだと記憶している。推薦入試を導入するまでは、筆者が勤務する短大でも学力試験を行って入学者を選抜していたが、平成になってから4年制大学への進学希望者が増加するにつれて短大の入学者数を確保するために多くの短大で推薦入試を導入するようになった。

そのため、筆者が勤務する短大でも、面接と高校から提供される調査書で一定数の学生を入学させるようになった。学力試験を行っていた頃は入学定員を超える受験者の中から一定水準の学力を備えた学生を合格させていたが、推薦入試導入後は学力だけでなく学習意欲も大幅に低下したと感じるようになった。また、そのことは就職試験への取り組み方にも顕著に表れていて、ピアノやその他の条件がつけられた幼稚園や保育園の採用試験を敬遠する傾向が強まったのである。

しかし、推薦入試の導入による学生の変化は、まだ序の口であった。というのは、その後しばらくすると短大を取り巻く状況がさらに厳しくなると、入学者を確保するために多くの短大でいわゆる「指定校入試」を導入するようになったため、推薦入試では短大を希望する学生は目を向けなくなってしまったからである。そこで、指定校入試を取り入れたが、それによる落ち込みは一段と大きなものであった。

説明するまでもないが、指定校入試というのは、高校に割り当てた指定枠の範囲内で高校の選抜によって受験する方法である。受験と言っても、高校からの調査書と推薦書・面接で入学者が決まるが、指定枠内での推薦ならばよほどのことがない限り不合格になることはないから、入試は形だけの様相を呈しているといえよう。

その結果、学生数はなんとか定員を確保しているものの、進学の動機が曖昧な受験生も少なくなく、新学期早々に授業を受ける意欲を喪失して退学を申し出たり保護者や短大の担任に説得されて休学したりする学生が増えている。2年間の在学中に保育者としての学習をどれほど高めることができたかは定かでないが、1学年240名のほとんどが保育者としての就職を希望している。

ところが、就職して1年後には相当数の卒業生が職場を離れている。もっとあからさまに言うなら、就職が内定した幼稚園やこども園・保育所で卒業前に実施される新年度に向けての「内定研修」中に退職してしまう学生（まだ就職していないのだから「退職」という表現が適切かどうか不明だが）や就職して1か月足らずで自分から職場を去ったり園側から退職を勧告されたりする卒業生も増えている。

自分から職場を去る卒業生の多くは「思っていた仕事と違って」「職場の人間関係が作れない」が多く、退職を勧告される卒業生の場合は「仕事ができない」（ピアノが弾けない・連絡帳が書けない・保育の指導案や記録が書けない）という理由が大半である。

学生が書く文章に推量表現がほとんどないということは、学生が目に見える事実だけを書いていて、想像力を働かせていないことのあらわれである。そして、このことは、子どもとの対応に想像力が必要な保育者にとって非常に憂慮すべき問題ではないだろうか。

このような学生が保育者になったとしたら、安心して子どもを託せるだろうか。私たちはそれを問題にしなくてはならないであろう。保育という仕事は、乳幼児の「いま」の生活が安全であることを保障しなくてはならないが、それだけに止まらない。それは、乳幼児の将来の生き方を左右するほど大きな責任も負っているからである。そのことは初めに取り上げた「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」等の指摘を待つまでもないで

あろう。ところが、現実には都市部を中心にした深刻な待機児童問題のために保育者は完全な「売り手市場」で、資格さえあれば（取得見込みならば）次々に就職先が見つかる状態である。

その一方で、認可園でさえ乳幼児の死亡事故が後を絶たないだけでなく、傷害事件や「うっかりミス」による乳幼児の被害が発生している。筆者の所にも、ニュースにこそならないものの、これまで卒業生が「言うことを聞かない園児を椅子に縛りつけていた」「お漏らしをした子どものお尻をたたいていた」「給食を食べるのが遅い子どもの口に食べ物を押しこんでいた」等の情報が寄せられている。

このような情報を耳にすると、学生だけでなく保育現場の卒業生にも問題があると思わざるを得ないのだが、卒業生のレベルも年々低下していることは想像できるので、その一例として、実習生が書いた実習日誌に書かれていたクラス担任のコメントの文章を紹介しておこう。以前のコメントには見られなかった書き方である。

- ①いつもにこにこしていたので、子どもに親われていました。
- ②自分から質問することもなく、責極性が感じれなかつた。
- ③まじめな態度で実習に望んでいました。
- ④保育士として必要なのは、子どもへの関わり
に自分の考えをいかしていく努力が欲しいと
思います。
- ⑤いつも明るい笑顔を心がけてほしいです。
- ⑥ピアノの楽譜を渡しておいたところ、完璧に
練習してきました。
- ⑦わからないことを質問したりはきはきした態
度で子どもと関わるとよかった。

最近の実習日誌に見られた文章の一部分を紹介しただけだが、漢字の間違いは言うまでもなく、日本語として適切な文章表現ができていないコメントが非常に多くなってきたことが気になる。

8 短大で取り組むべきこと（今後の保育者養成に向けて）

こうした状況を見ていると、乳幼児の生命を保護し、その将来を見ずえて保育する立場をめざす学生として、非常に深刻な問題が浮かび上がってくる。基礎学力の不足は言うに及ばず、専門家になるという自覚の希薄さや子どもの成長モデルとしての自覚の少なさから生じる生活態度の問題と学ぼうとする意欲の低さ等、あげていけばきりがなく、しかも、そうした問題の根底はすでに指摘したように学生の責任というよりも幼少時期の生活環境に起因するところが多いように感じられる。それを短大の2年間で大きく転換することは容易ではない。だからといって、このまま見過ごすこともできない。

学習意欲に関しては10年ほど前から試みていることがある。それは各学期の講義を開始する際に、私たちの「いのち」について話すことである。その詳細については以前に「短大生の学習意欲と仏教教育——動機づけとしての〈いのち〉の話——」として発表した^(註17)のでそれを参照していただきたいが、その要旨は「私たちの生命がいかにかがたいものであり、はかないものであるかを具体的な数字を示しながら説明し、今という時間を精一杯生きることが重要」であることを示したものである。30分ほどの時間を使っての説明だが、担当者の予想よりも大きな反応が得られたことをうれしく思ったことを記憶している。そして、その話を聞いてから学習態度に改善が見られた学生もかなりいたのであるが、この10年間で「いのちの話」に対する反応も薄れてきたと感じている。

そこで、現在の学生を改めて見つめてみると、理論的な学習や机上の学習にはほとんど反応を示さないのだが、運動遊びや絵画制作等の身体を使った活動の場合は生き生きしていることが窺える。これは子どもの遊びに通じていることであるが、

子ども時代に戻ることはできないので、これからは身体活動をしているときの気持ちを思い浮かべさせながら、保育者にとって乳幼児期のお手伝いや遊びがいかに大きな意味を持っているかを学生自身に考えさせ、それを土台にしながら学生自身が主体的に保育者になるための知識や技能を学んだり身につけたりすることがどれほど重要であるかに気づかせようと思っている。

そのことに気がつけば、これまでよりは主体的に短大における学習に取り組むようになるのではないかと考えている。

註

- (註 1) 保育小辞典編集委員会編『保育小事典』(大月書店 2008 年: 292 ページ)
- (註 2) 田中未来編集代表『改訂子どもの教育と福祉の事典』建帛者 2006 年: 106 ページ)
- (註 3) (同事典 106 ページ)
- (註 4) (同事典 106 ページ)
- (註 5) (同事典 107 ページ)
- (註 6) 柏木『子どもが育つ条件』(岩波書店: 2008 年 はじめに)
- (註 7) 柏木 同上書 (はじめに)
- (註 8) 柏木 同上書 (70 ページ)
- (註 9) 柏木 同上書 (70 ページ)
- (註 10) 柏木 同上書 (85 ページ)
- (註 11) 柏木 同上書 (87 ページ)
- (註 12) このことに関しては、以下の拙稿で紹介したことがある。
拙稿「保育科学生の実態について——人間生活の基層部分における問題点——」(『育英短期大学研究紀要』第 6 号: 1988 年)
拙稿「保育科学生の実態について(その 2) ——大学・社会との関連を中心として——」(『育英短期大学研究紀要』第 7 号: 1989 年)
拙稿「保育者をめざす学生の基礎学力と生活習慣 ——文章表現に見える問題点を中心に——」(『育英短期大学研究紀要』第 25 号: 2008 年)
- (註 13) 汐見『身体力の基本は遊びです』(旬法社 2008 年)
- (註 14) (建帛社だより『つくし』第 104 号巻頭言: 2017 年)
- (註 15) 拙稿(『育英短期大学研究紀要』第 19 号: 2002 年)
- (註 16) 拙稿(『育英短期大学研究紀要』第 23 号: 2006 年)
- (註 17) 拙稿(『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第 14 回: 2013 年)

(2016 年 12 月 12 日受理)